

発展途上国の経済分析——序

の 野 原 たかし 昂

発展途上国の経済発展に関する諸問題を経済学
に基礎を置いて研究する分野としての「開発経済
学」は最近反省期に入ったように思われる。高山
晟「開発経済学の現状」はハーシュマンを引用し
つつ、「かつての栄光と熱気が想起されるだけに、
その凋落が淋しく又目立つ」と指摘している(注1)。

また、世界銀行では1940年代、50年代に開発経
済学に貢献した先駆者10名を招いて、自らの理論
の現時点での再評価を聴くセミナーを開催し、そ
れを出版した。その書の編者の一人であるマイヤ
ーが述べているように、「個々の論文において、
著者は開拓時代の知的興奮と期待、そして活力を
取り戻している。これら諸論文は自伝的な面白さ
だけでなく、まとめて見ると開発経済学に生起し
たことを回顧的に見直すまたとない機会を与えて
くれる。そして、もちろん回顧的展望は、この分
野の将来の方向への示唆を与える」(注2)。

これらに示されているように、新しい理論が次
々と生み出された戦後期に比較すると、現在の開
発経済学は低迷していると見えるかも知れない。
これにはさまざまな理由も考えられようが、最大
の理由は発展途上国研究の深化にともないその多
様性が理解されるようになり、画一的な理論化が
困難になったことであろう。

しかしながら、「開発経済学」の低迷は発展途

上国の経済分析の低迷を意味するものではない。
むしろ、従来の「開発経済学」によって確立され
てきた発展途上国の「特殊性」を洗い直し、より
一般的な経済学の分析枠組を用いて発展途上国の
多様な現実を定型化し、それを理論化していく作
業が現在さかんに展開されている。今後とも、発
展途上国研究にあたっては、このような地域横断
的な経済分析がますます不可欠になるものと思わ
れる。

以下に続く「マクロ経済」、「工業」、「農業」、
「金融」、「貿易」、「所得分配」の6テーマは、こ
うした経済学の分野別研究に携わってきた当研究
所経済成長調査部の6人の研究者が最近の各分野
における研究成果を展望したものである。その多
くは各分野の研究状況を反映して定型化されつつ
ある事実を扱っており、新しい理論的枠組のなか
でそれらを整理することで今後の研究方向を示そ
うとする試みである。この分野の今後の研究のス
テッピングストーンとなれば幸いである。

(注1) 高山晟「開発経済学の現状」(安場保吉・
江崎光男編『経済発展論』創文社 1985年) 278ペ
ージ。

(注2) Meier, Gerald M.; Dudley Seers 編,
Pioneers in Development, A World Bank Publica-
tion, ニューヨーク, Oxford University Press, 1984
年, ix ページ。

(アジア経済研究所経済成長調査部主任調査研究員)